

# 浮舟についての試論

平山典子

## 序

「源氏物語」に登場する最後の女主人公が浮舟である。浮舟は、実父宇治の八宮に認知されず、また母中将の君とともに引き取られていった先の常陸守のところでも完全に娘になりきることができなかつた。美しく成長した後は、薫・匂宮という二人の男の愛情の間に揺れ、死を決意するまでに悩み苦しんだ。だが結局それも叶わず、徳高き僧の手を借りて尼に姿を変えたのである。浮舟はその名の通り、寄る辺なき人生を流されるように生きた。そして最後にようやく自らの意志で選び取った道は世俗と縁を切ることだったのである。

浮舟はよく悲劇の女性と呼ばれるが、「源氏物語」の最後を締める浮舟の物語が、単に一人の女性の悲劇を描くことを目的として書かれたものであるとは考えにくい。浮舟とはいかなる女性だったか、物語の中でどのように生きたか、また作者は有終の美を飾るべき物語最後の女君に何を語らせようとしたのかを考えてみたい。

尚、テキストは日本古典文学大系『源氏物語四』『源氏物

語五』（山岸徳平校注・岩波書店刊行）を用いた。引用は同書による。

## 第一章 人形としての浮舟

### 第一節 登場をめぐって

浮舟の物語が始まるのは、浮舟登場の瞬間ではない。薫と、浮舟の異腹の姉中君の二人によって既に浮舟に要求される役目がその意思に関係なく用意され、その時から物語は動き始めていたのである。浮舟に用意されていた役目とはどんなものであったか。その登場までを辿りながらみていきたい。

大君・中君は、薫が法の友として親しくつき合っていた、叔父の宇治の八宮の娘である。薫が心を寄せていたのは二つ年上の大君だった。だが大君は、薫の好意を受け入れることなく、八宮の一周忌が過ぎて間もなく世を去った。薫は大君の最期を看取りながら改めて知る大君の美しさに困惑し、更に恋しさを募らせた。大君の面影を追う薫の魂の彷徨がこうして始まった。だんだん大君に似通っていく中

君に自然薫は心を惹かれ会いに行くのだが、今は匂宮の妻となつて中君に煩しく思われもし、遣り場のない思いに苦しんだ。かと言ってその苦しさから逃れたく大君のことを忘れようと努めているわけではなく、敢えて昔を偲ぶため宇治を訪れる薫であつた。あくまで薫の思慕の対象は大君なのである。

思ひ給へわびにて侍り。「音なしの里」も求めまほしきを。かの山里のわたりに、わざと、寺などはなくとも、むかし思ゆる人形をも作り、絵にも書きとめて、「行ひ侍らん」となむ、思ひ給へなりにたる

〔宿木〕90頁)

これは中君に漏らした薫の言葉である。大君への恋情を持つて余した薫は、昔を思い出す人形を作り勤行したいと考へた。ここで薫の言つた人形というのは、いわゆる人形の意であり「昔思ゆる人形」とは、亡き大君の像を意味していた。ところがこれに対し中君は、

あはれなる御願ひに、又、うたて、御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしう侍れ

〔宿木〕90頁)

と答へた。薫の言つた人形という言葉から、同じ人形でも身の罪や穢れを移して水に流す撫で物の意の人形を連想し、尊い御発願だが、人形というのは水に流される撫で物と思わせるから亡き人に気の毒だと言うのである。この不吉な連想は、その場限りの言葉遊びにとどまらなかつた。そして中君は「人形のついでに、いとあやしむ」〔宿木〕90

頁) 浮舟を思い浮かべ、異母妹の存在を薫の耳に入れた。その真意を平たく言うとは、姉大君また自分の代わりに、薫が浮舟に目を向けてくれれば、薫の苦しい恋心が楽になるだけでなく、自分もまた薫の執着が交わされて匂宮にいろいろ邪推されずにすみ、まさに一石二鳥というわけだったのである。

薫の方は、中君のそういった思惑が充分分かつていたこともあつてか、言い寄つてみて自分が望む程の人でなかつたらかえつて後が面倒だと、至つて冷静に構えていたが、初めて浮舟を見た時、昔の人によく似たその人に胸をときめかせもした。物事にあまり動じない薫が、その場から立ち去り難く浮舟に心を惹かれたのも珍しい事だつた。だが結局薫の浮舟に対する評は「こと人なれど、慰め所ありぬべきさまなり」〔宿木〕125頁) どりなりなのである。

見し人の形代ならば身に添へて恋しき瀬々の撫で物に  
せむ  
〔東屋〕159頁)

浮舟は薫にとつて「見し人の形代」であり、大君が恋しい折々にはその苦しさを撫で移す「撫で物」であることを要求されたのである。浮舟は初めからその個性を無視されてきた。「薫と中君の双方がかれらの〈苦〉を抜除してくれる存在として浮舟を要請」し、登場してからの浮舟は専ら、薫の心を慰めるべく生かされるのである。

## 第二節 生かされる女君

「人形」的存在であることを要求された浮舟は、自分

身それを自覚することなく、その役割を担い、薫の「山里の慰め」(浮舟「202頁」として生かされた。またそれに応えるようにいたっておとなしい人だった。「人形」として生き、「人形」にふさわしく、周囲の人々にそれぞれの思いを撫でつけられ、(結局未遂に終わるが)入水するのである。中君の不吉な連想は、まさに「いと、あやししく」現実となった。水に流される運命にある撫で物と同じ道を辿るように入水することによって「人形」としての人生の仕上げをしたという言い方もできるだろう。ここでは、死を決意するまで大君の身代わりとして生かされた女君の姿を見てみたい。

東国育ちの浮舟は、「お中びたることも、うちまじ」(「東屋」159頁) っており、優美さという点では薫の目から見て中君の目から見ても故大君に劣っていた。しかし、中君が浮舟を見て、姉の大君を見ているような気になる程、容貌の点では似ていたのである。それで程々に上品で美しい女性であれば、薫の心を慰めるのに充分だったろう。また誰かの身代わりとして見るのに適した、非常におとなしくおっとりとした性分だった。どうかすると「おいらかに、あまりおほどき過ぎたる」(「東屋」194頁)のが頼りない程だったが、そういう浮舟を見て、薫は、かえってその方がいいと思いたくはない。いろいろ教え込めば自分の望むようになるだろうと思わせる余地のあるところに、浮舟の人形としての価値があった。薫は、人形を作るくらいなら大君に似た姫君を山里の本尊に、という初めの望み通り、浮舟を

手に入れ、宇治に連れ、そこに据えて安心した。

その隙をつくように、浮舟と匂宮が密通する。初めのうちこそ匂宮を嫌悪していた浮舟だが、だんだんとその愛情の深さに惹かれていった。当然のことながら、浮舟は本物の人形にせうぎやうでなく、感情を持った人間であった。薫に対する背信行為とも言うべきこの事件が浮舟に苦悩をもたらした。薫とのつながりによって得ようとしていた安泰、またそれを心待ちする母、匂宮に惹かれていた自分の気持ち、その他全てが同時に叶わないことは浮舟にもよく分かっていた。しかし、二人の男は苦悩する浮舟に無遠慮に求婚してくる。このままでは二人の間に不祥事が起こってしまう、いっそ我が身を亡きものに、と考えた浮舟であった。人の身の災いを避けるための入水だったと見るなら、まさにそれは「人形」としての役目であった。浮舟自身、もちろんそういうことは自覚していないのだが、無自覚のうちに「人形」を担わされ、無自覚のまま、自分の身を、自分の為でなく水に流した。入水は『人形』性を完成する道であった。入水によって浮舟は「人形」としての人生に終止符を打つのである。

## 第二章 二つの愛をめぐる内面の葛藤

前章で、浮舟は人形ひとがたとしての役目を全うするように入水したと述べた。だが浮舟自身からすると、その内面に苛烈な葛藤があり、苦しみ抜いての結果であった。浮舟を入水に追い込んだ心の葛藤とはどのようなものであったか。薫

匂宮がそれぞれ浮舟にどのような愛情を注いだか、浮舟はそれらをどう受け止め、どう煩悶したのだろうか。

浮舟の苦悩の発端は、二条院の中君のところに身を寄せられている浮舟を匂宮が見つけてしまうという偶然だった。浮気っぽい性分の匂宮が自分の目に「浅ましきまでに貴に、をかしき人」(「東屋」167頁)と映った浮舟をそのまま見過ごすはずがなかった。浮舟はすかさず衣の裾をとらえられ、突然のことに「たゞ、いみじう、死ぬばかり思」(「東屋」167頁)っている、ちょうど匂宮の母、明石中宮の容態急変の知らせが入り、難を逃れられた。「たゞ、いみじくはしたなく、(中略)うつ臥して、泣」(「東屋」171頁)く浮舟の行爲は充分納得できる反応であった。ところがその後移り住んだ三条の小さな家で、退屈で晴れ晴れとしない日々を送りながら、この事件を思い出して、何かしきりにしんみりとしたことをおっしゃっていたがどういふことだったのだろうかと考えているのである。思い出すのもおぞましく忌々しい記憶のはずである。ここに、浮舟の心に変化が起こっていることを見てとってよいだろう。そして匂宮の行動が、ただの「うちつけたる御しわざ」(「東屋」161頁)だったということにも注意しておきたい。

何も知らない薫に、宇治に隠し据えられるのはそれから間もなくであった。宇治への道中、宇治が近くなるにつれ、薫は大君への恋しきをつのらせ、車を降りてからは、大君の魂に心遣いをして浮舟のそばから離れているというふうだった。前章でも述べたように、浮舟を大君の代わりに

「山里の慰めと、思ひ掟てし」(「浮舟」202頁)薫の心だったのでこれでひとまず安心する。そして、そのうちゆっくりに訪れることにして下手に人に知られまいと考える。

にはかに。何人ぞ。いつよりなど、聞き咎められんも、物騒がしく、初めの心に違ふべし。(「浮舟」202頁)

浮舟との関わり合いが原因で、他人に中傷されたり面倒なことになったりするのには、御免蒙るのである。「いかに、もてない給はんとするにか」(「東屋」194頁)という浮舟の不安をよそに、実に冷静沈着な薫の態度である。

一方、匂宮は浮舟のことが忘れられず懊悩していた。浮舟がどこかへ姿をくらし、中君が、浮舟の居場所を知りながら隠していることも気がくわかない。人を使って探りを入れ、薫の懸想人であったことが分かると、中君と薫が気脈を通じて隠しているのが妬ましくもあった。また、あのとき二条院で何事もなく済ませてしまったことがずっと心残りでもあった。親王という重い身分でありながらとうとう宇治まで出かけ、再びあのときの女を垣間見、どこか中君に似た浮舟に「いかでか、これを、我が物にはなすべき」(「浮舟」215頁)とやきもきするのである。ついに、匂宮は薫になりすましてめぐり込む。浮舟が、薫でないことに気付いたときは既に女房たちの引き下がった後だった。驚愕と中君への畏怖の念に泣く浮舟であった。だが、明るく日頃の浮舟は匂宮に対して「心ざし探しとは、かかると言ふにやあらん」(「浮舟」221頁)と感じているのである。いつも体裁よく穏やかな薫に比べて、「時の間も、見ざらん

に、死ぬべしと、思し焦がるよ」(浮舟「221頁」) 匂宮の態度は浮舟にとって印象的だった。浮舟を「世に知らず、あはれに思さるよまゝに、よろづの誹りも、忘れ」(「浮舟」219頁) るといった真似は薫には出来ない。浮舟の方も、今までは薫をまたとない人のように見ていたのに「こまやかに匂ひ、清らなることは、こよなく、おはしけり」(「浮舟」223頁) と、匂宮に徐々に傾いていった。

しかし、浮舟の理性は、これを否定しようとする。薫に会えば会ったで、始終会えない恋の苦しみを言葉少なに程よく匂わせるような人柄に触れ、優艶な姿はほめるまでもなく、「行く末ながく、人の頼みぬべき心ばへ」(「浮舟」231頁) は匂宮に比べてずっと優れている点を改めて評価する。薫の来訪を匂宮がどんな気持ちで聞くだろうと思うとつらく、匂宮との密通が露頭して薫に疎まれるようなことになつたらと恐れ、様々に思い悩む。そういう浮舟を見て薫は「月ごろに、こよなう、物の心知り、ねびまさりけり」(「浮舟」231頁) と勝手な勘違いをして感心していた。しかし誤解とは言え、少し大人びた浮舟を見直し、京へ戻る薫が後ろ髪をひかれるような気持ちになつたのはある意味では成長である。

その現れか、珍しく薫が浮舟をしみじみと想い「衣かたしき今宵もや」(「浮舟」234頁) とつぶやく。同じあたりに想いを馳せていた匂宮は、自分の目から見ても「あてなる男の本」(「浮舟」235頁) である薫を見て、浮舟がこれ程の人をさし置いて自分に靡くだろうかという不安にかられ

る。雪のひどく降る日匂宮は、人通りもまれな恐ろしい宇治の山里の浮舟を訪れ、浮舟も「浅ましう、あはれ」(「浮舟」235頁) と感じ入る。「かたみに、あはれとのみ、深く思し勝る」(「浮舟」240頁) 二人なのである。匂宮の存在は浮舟の中ですますす大きくなり、またそうなるに連れて苦悩も増大していった。

浮舟には別に大切な人がいた。最愛の母、中将の君である。母もまた、浮舟の幸せを誰よりも願っている。その母が、薫との結婚を誰よりも喜んでるのだし、自分も初めからそのつもりだったのだからと自分自身に言い聞かせる。それでもちょっとまどろむ間に、匂宮の幻影が目の前にちらつくといった有様は自分でもいやになる程であった。安泰な幸福をもたらしてくれ、行く末永く頼りになるのは、恐らく薫である。母は母で、順調にことが運べば薫と愛娘が結婚するであろうことを手離しで喜び、その準備に余念がない。薫を裏切ることがは軽々しい、間違つたことなので必死に思い込もうとしていた。それでもななお決心できないでいるのは匂宮に情が移っているせいにはかならない。ところが、二人の男君の愛情はこうした浮舟の葛藤に応えるようなものではなかった。

「あり難き物は、人の心にもあるかな。『らうたげに、おほどかなり』とは、見えながら、色めきたる方は、添ひたる人ぞかし。：(中略)：『今は』とて、見ざらん、はた、戀しかるべし」と、人悪く、いろく、心の中に思す。(「浮舟」257頁)

浮舟と匂宮の關係を知った薫には激しい憤りも悲しみもない。浮舟が恐れていたことは、実際はこの程度でしかなかった。好色めいたところはいかにも匂宮にお似合いだ、いっそ譲ってしまおうかと冷たくつき放すようなことを考へては、また、初めから正妻にするつもりでもなかったし、と考へ直す。縁を切ってしまった、恋しくなつたとき後悔するかも知れないことを懸念する程度である。浮舟にとつては侮辱でしかない。仮に、匂宮が浮舟を引き取つたらと考へると、

さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に、人二三、  
參らせ給ひたなれ。さて、いで立ちたらむを見聞かん、  
いとほしく  
〔浮舟〕257頁

と思われて、捨てておけない気がする薫である。しかし、浮舟への情愛の深さからくる優しさというよりも、薫自身の性分としての思いやりによるところが大きい。また、匂宮の移り気による前科をうかがい知ると、浮舟に対する今の深い愛情も実に心もとない。「八重たつ山に籠るとも、かならず尋ねて、われも人もいたづらになりぬべし」〔浮舟〕247頁〕と言つた言葉もその信用性のほどが疑われるのである。

浮舟の入水は、母中将の君の次の言葉によつて思いつかれた。

よからぬ事を、ひき出で給へらましかば、すべて、身  
には悲しく、いみじと、思ひ聞ゆとも、又、見たてま  
つらざらまし  
〔浮舟〕250頁

他ならぬ母の言葉であつたことで、浮舟はひとしお肝をたぶす。聞かえてくる、宇治川の流れの凄まじい響きも意味ありげだつた。が、入水を決めた目的は、二人の男の諍いを避けることにあつた。いつか女房達がしていた、一人の女に懸想した二人の男が、それが原因で身を滅した話が脳裡をよぎる。それは何とかして避けよう、自分さえ消えれば丸く収まるだろうと信じて決意された入水であつた。しかし、密通を知つた時の薫の反応からしても、薫と匂宮の鎗を削る争いは考へにくいのである。

浪こゆるころとも知らず末の松まつらんとのみ思ひけ  
るかな  
〔浮舟〕258頁

薫に、不義を知つたことを仄めかされ一層胸を痛める浮舟は、

所違へのやうに見え侍ればなん  
〔浮舟〕258頁〕  
と懸命に決然とした返事をした。薫はそれを見て、思いがけない浮舟の機転についはほえむ余裕ぶりである。「薫と匂宮の現実はず浮舟がそのために死ぬに値しない現実であつた」。言い切るなら、浮舟のしようとしてゐることは無駄死にである。それを必死の思いで決意した浮舟に、ますます悲劇性が高まるのである。

### 第三章 蘇生後の浮舟

#### 第一節 浮舟の変容

いよいよ宇治川へと向かつた浮舟であつたが、決意も虚しく命を助けられ出家への道を辿る。蘇生後の浮舟には入

水前とは違う、内面の変化が認められる。尼になり、外見も変わった浮舟の変容ぶりを見てみたい。

風の吹きすさぶ夜、人知れず邸を出た浮舟は、恐ろしさの中で、自分をどこかへ連れていく匂宮の幻を見た。いよいよ死のうという時に、匂宮を恋う素直な気持ちが覗いてみえたのである。そして、いつの間にか正気を失い、まだ息の残っていると、徳高き横川僧都に助けられたのである。僧都の祈禱とその妹尼の手厚い看護によって息を吹き返したものの、浮舟はまだ死を望んでいた。死に損なったのが甚だ不意だったのだが、そのうち、せめて尼にして欲しいと言いつ出した。浮舟は苦い過去の世界から抜け出そうと、素姓を尋ねられても頑なに口をつぐんでいた。しかし、この誰とも分らない姫君を妹尼は亡き娘の代わりに大切に、尼にしてみようことを惜しんだ。

だが、妹尼の娘婿だった中将が、浮舟に想いを寄せ始めたため、浮舟の出家の願いはますます強くなる。昔を思い出すようなことは真つ平だった。とうとう浮舟は、横川僧都の手を借りて出家の本意を遂げる。

猶、ただ今は、うれし。世に経べきものとは、思ひがけずなりぬるこそは、いと、めでたき事なれ

(「手習」391頁)

という心境であったのだが、髪を下ろすに当たって、その前に今一度母と対面できないことだけは最後まで心残りであった。その後も母のことを絶えず思い出しては、涙をこぼした。それだけに、そういう気持ちを押し切ってまで世

俗を断ち切りたかった思いの程が推し測られるのである。

浮舟は、以前のおとなしいだけの女性から脱皮していた。夜中寝覚めして、眠れないままにこれまでの生涯を回顧する。

親と聞えけむ人の御かたちも、見たてまつらず、  
(中略) …のどやかに物し給ひし人は、この折、かの折など、思ひいづるぞ、こよなかりける。

(「手習」383頁)

思い出してみると楽しかったことはほとんどなかった。ようやくやく流浪と縁を切り、不運な境涯から脱け出そうとしたときに、匂宮に恋をするという馬鹿な料簡を起こしたことが、こんなことになった原因だったと、冷静に客観的に判断している。思慮深さを備え、信頼すべき人として、堅実な薫を高く評価し懐しむ、ごく世間的に利口な女性へと変身している。

しかし、変身したとは言っても、蛹が蝶になるのとは訳が違った。姿は尼にやったものの、気持ちに伴っていないため、そこに生じると、薫の姿を苦しめる。男女の世界を断ち切ってもなお、薫の姿をせめてよそながらにでも拝見することはできないだろうかという一縷の望みを捨てきれない。その薫が、浮舟が生きていたらしいことを聞きつけ、浮舟の弟の小君を使いとして遣った時も、小君の姿を御簾の中から覗き見は「かたみに思へりし童心」(「夢浮橋」429頁)を思い出し、また「母の有様、いと問はまほしく」(「夢浮橋」429頁)思い、悲しさについはろほると泣いてし

まうといった具合だった。外見とは裏腹に心の静謐からは程遠い浮舟なのである。

## 第二節 蘇生した浮舟にみる

### 物語の主題

浮舟は死を願ったにもかかわらず死ねなかった。少なくともそのように描かれたが、本当は生き返るべくして息を吹き返したと思われる。話が順当に進んでいれば、宇治に据えられた浮舟という人形には、薫によってそれなりの幸福がもたらされたはずだったのだが、「浮舟の物語はそういう水準の物語を否定し」たのである。匂宮の出現によって浮舟の平和は崩れた。悲劇は入水にまで及び、自らを犠牲にするように入水したことによって人形性が極められた結果となった。そこで死んでしまっていたなら浮舟は人形で終わってしまうはずだった。しかし、物語最後の女主人公に託されたものはそういうものではなかった。浮舟が登場した意味は何だったのだろうか。

まず、浮舟の物語には非の打ち所のない、理想的な人物が見当たらない。しかも浮舟入水後の物語は話の筋においても平凡の色が濃くなっている。道心深く嗜み深かったあの好青年・薫は少しその姿を変え、匂宮が心を寄せている美しい女房の一人でも口説いてやろうかと考える（「蜻蛉」巻）など、俗な面を覗かせている。また浮舟が実は生きていたことを知って会いに出かけ、使いとして送った小君にも浮舟が会おうとしなかった時、昔の自分の経験から「人

の、かくし据えたるにやあらむ」（『夢浮橋』435頁）と勘ぐる薫には下品さすら漂う。

匂宮は浮舟他界を聞き、初めのうちこそこらえようのない辛さに打ち拉がれていたが、案の定他の女性へと目を向けるようになっていった。しかし匂宮の特長でもあった好き心によって、ある恋愛模様を創り出すには至っていない。読み物としての面白みに欠けた印象さえ受ける、ごく日常的な世界である。

だがこのことが物語の質的水準を下げているわけではない。より現実に近いドラマを繰り広げることで、物語がもはや「仰ぎ見られるものではな」くなり、憧憬の世界から読者の世界へ降りてきたのである。作者は、何かを現実の問題として捉え、考えようとしていたのではないだろうか。浮舟を、容貌に恵まれ、当代の並びなき貴公子二人に愛された人と呼ぶなら、幸福な人としてまさに憧憬の対象となる。しかし先にも述べてきたように、三人の現実とは、単純・清らかなものではなかった。浮舟は二人の男に悩まされ、入水へ向かった。言い換えるなら、入水は、窮地に追いつめられた女としての決意だった。そういう自分の生命を否定することで、薫と匂宮の愛と一緒に、その間に挟まれた女であるということを通り切った。

それなら、男女の世界を自ら断ち切るには死ぬしかないのかということになるが、少なくとも作者はこのことについて否定していると思われる。愛情に、確執に揉みくしゃにされ、死という手段を選ばしかなかった浮舟に手を差し

延べ救いの可能性をもたらしたのが、横川僧都、またはその人に象徴される仏道ではなかったか。命を助けられた浮舟は、この高德の僧によって出家を遂げた。とは言っても母に対する愛情は断ち切り難く深く、穏やかで優しくかった薫は懐しい。昔のままの筆跡の薫の文を見て泣き崩れる浮舟である。悟り切って出家したわけではなく、形からの入道だったのである。尼になった浮舟の心は、なお揺れている。しかし、一度地獄をくぐり蘇生した女君は、同じ地獄をくぐる危険は冒さない。薫を慕う気持ちを、「なほ、悪の心や。かくだに思はじ」(「手習」384頁)と戒しめる心を持っている。たとえ今は高尚に心静かな出家生活を送っていないとしても、男女の世界から離れて彼岸に向かおうとする懸命な努力が見られる。そこに、浮舟の救済、男と関わりあわず生きていこうとする女の静かな幸福への望みを仏道に託してみようとする作者の姿が見えてくるのである。五十四帖という長編にわたって実に様々な男女の愛の世界を描き続けてきた作者は、物語の最後をおとぎ話で終わらせることはせず、読者とともに現実を見つめた。そして、男女を超え、死に等しい苦しみを超えた向こうにどんな救いがあるのか、その答えを、入道し尼となった浮舟に預けたのである。

### 結び

たち花の小嶋は色も変らじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

(「浮舟」237頁)

浮舟という名は、浮舟自身が自分の境遇を詠んだこの歌に

由来するが、この言葉が見事に彼女の人生を象徴している。作者は、読者が夢を託す物語の主人公に、最後まで末永い幸福を約束しなかった。しかし、作者はそれ以前に物語の中に生きる人物、特に主人公の、読者の憧れの対象という性格を変えていた。浮舟には容姿の美しさがある程度与えられてはいるものの、絶世の美女というほどではなく、和歌や音楽の特別の才能があったわけでもなかった。最高級の身分もない。東国で育ったことによる田舎臭さもそのままに描かれた。どこをとってみても決して理想の女性とは言えないのである。だが現実的色彩の濃いものであったから、浮舟物語の世界は、各読者が自分の世界に置き換えて考えるものとなり得た。

読者は、自分自身を浮舟に重ねながらいろいろの疑問にぶつかっていく。二人の男のうちどちらが幸せを託すにふさわしい人物なのか、男女の世界が厭わしくなった時抜け出す道はないのか。浮舟は、自らその命を断つことを決めた。だが悲しいことに、二人の男の気持ちはそれに見合うものではなかった。そしてまた読者は考える。ここまで追いつめられた悲愴な女君に救いはないのだろうか。作者は浮舟を出家へと導いたのである。浮舟は入水によって男の心に揺れる女であることと別れ、一方では薫の慰めものとしての人形とも訣別した。さらに、忌むしい過去に背を向け仏門に入ること、薫と匂宮の、浮舟の死に値しなかった愛を超えた。とは言え、出家を遂げた浮舟に今も静謐は訪れていない。まだ二十三歳の若い尼君は、髪を下ろした

ということにすぎないようにして、男女の関わりに惑わされまいと努力する。その懸命な姿を想うとき、私達読者は、浮舟がいつか真に救済されることを願ってやまないのである。

注1 日向一雅「浮舟についての覚え書き―『人形』の方法と主題的意味」(『日本文学』第三十卷)

注2、3、4

注1に同じ

注5 加納重文「源氏物語の研究」(望稜舎)

